

COLLATERAL

2005(平成17)年1月29日鑑賞(ホクテンザ2)



監督＝マイケル・マン／出演＝トム・クルーズ／ジェイミー・フォックス／ジェイダ・ピネット＝スミス／マーク・ラファロ／ピーター・バーグ／ブルース・マギル (パラマウント映画、ドリームワークス映画、UIP 配給／2004年アメリカ映画／120分)

……主人公は、高級スーツに身を包んだ紳士ながら、その実は冷酷な殺し屋のヴィンセント。トム・クルーズ扮するこの殺し屋と対峙するのは、偶然ヴィンセントを客として乗せたために殺しの「仕事」に巻き込まれていくタクシー運転手。しかし、その最後の標的が明らかとなった時、遂に2人は……？ 『ラストサムライ』(03年)に続くトム・クルーズの主演作で、その狙いはわかるものの、ちょっと単調すぎるのでは……？

ヴィンセントの人物像は？

この『コラテラル』でトム・クルーズ演ずるヴィンセントという「殺し屋」はプロ中のプロだが、誰の依頼で、何のために一連の殺人を請け負ったのかはあまり明確ではない。というよりも、それはこの映画のテーマの1つであるヴィンセントという殺し屋のパーソナリティや殺し屋とタクシー運転手との「追っかけっこ」というメインテーマと直接関係がないため、かなり省略されている。

パンフレットによると、トム・クルーズは「この冷血な暗殺者を『悪役』という白黒はっきりした見方で捉えていない」うえ、「僕はこれまでに、ヒーローもアンチヒーローも演じてきたけど、ヴィンセントは素晴らしいキャラクターだと思ったよ」と語っている。たしかに私の見立てでも、このヴィンセントという男は頭もよく冷静で自分に与えられた仕事を忠実に処理する人間であることはよくわかるし、またそういうキャラクターの人物であることはトム・クルーズの演技力によってスクリーン上にうまく表現されている。しかし、もう一歩突っ込んで、

そういう人物を登場させることによってどんな映画をつくりたかったのか？ということになる、正直私にはよくわからない……？

この映画のテーマは？

この映画のテーマは、たまたま殺し屋のヴィンセントを客として乗せたタクシー運転手のマックス（ジェイミー・フォックス）が、これもたまたま、第1の殺人の被害者がタクシーの上に落ちてくるという不幸に巻き込まれたため、ヴィンセントと行動をともにしなければならなくなり、ヴィンセントが請け負った一連の殺人の実行を軸としながら展開される2人の追っかけっこだ。この映画の脚本を担当したスチュアート・ピーティーはパンフレットで、「ストーリーの核心となるのは、この2人がネコとネズミの追っかけっこを繰り広げ、1対1の対決をするところなんだ」と語っているが、これってそんなに面白いテーマ……？

トム・クルーズの魅力は？

トム・クルーズはハリウッドを代表する俳優だが、同時に元妻のニコール・キッドマン主演の『アザーズ』（01年）の製作を担当するなど多方面の才能を見ている。しかし私は、『ラストサムライ』（03年）は評価しているものの、『マイノリティ・リポート』（02年）や『バニラ・スカイ』（01年）でのトム・クルーズはあまり評価していない。私が好きなのは、ニコール・キッドマンと結婚するきっかけとなった『遙かなる大地へ』（92年）や、この2人が倦怠期の夫婦を演じたちょっとエッチな『アイズ ワイド シャット』（99年）など。トム・クルーズはこの『コラテラル』では、後述のように高級スーツを着た白髪まじりの銀髪の冷酷な殺し屋という役を演じているが、果たしてその魅力のほどは……？

主役はどちら？

この映画の主役はもちろんトム・クルーズだが、完全にこれを食ってしまっている（？）のがもう1人の主役である黒人のタクシー運転手のマックス。映画の冒頭に、乗客として乗せた女検事アニー（ジェイダ・ピンケット＝スミス）とのちょっとした面白いストーリーが伏線として準備されているから、スクリーンへ

の登場時間からいってもこのマックスの方がヴィンセントより少し長いはず。また「冷酷な殺し屋」というヴィンセントよりも、真面目に12年間もタクシーの運転手を勤める中、ベンツを買って最高級サービスの客の送り迎えをする会社を経営したいという将来の夢を描き、ちょっとした合間に運転席のサンバイザーの裏に飾ってあるモルディブ諸島の写真を見ることによってリラックスするという自分流の処世術(?)を身につけているマックスの方が魅力的……?

これでは、「主役はどちら」と思わず聞きたくなくなってしまうが……?

女検事は刺身のツマ……?

前述した映画冒頭でのマックスと女検事アニーとの出会いはストーリー上何を意味するのか、この冒頭の部分だけはその後のストーリー展開と何の脈絡も持たないうえ、アニーもその後全くスクリーンに登場しないから、多くの観客は一体あれは何だったんだろうと思いつつ観ていたはず。このアニーが登場するのは最後のハイライトシーン。なぜ最後にこのアニーが重要な意味を持つてくるのか、それは映画を観てのお楽しみ……。しかし、そうであっても、やっぱりこの女検事はヴィンセントとマックスの追っかけっこを面白くさせるための刺身のツマにすぎないのか……?

パンフレットはちょっと手抜き?

この『コラテラル』のパンフレットは600円。ハリウッド映画では800円というのが標準(?)で内容も豊富だが、このパンフレットは私にはちょっと手抜きと思ってしまう。パンフレットにはふつう、イントロダクションとストーリー紹介があり、俳優の紹介とスタッフの紹介そしてプロダクションノートがある。そして2、3本の映画評論家による解説や対談などがあり、それなりにその映画に関する豊富な資料が満載されているはず。しかしこのパンフレットには写真はほどほどに載っているものの全体としての字数が少ない! つまり映画評論家による解説が1本もないわけだ。なぜそうなっているのかはよくわからないが、これでは「手抜き」と批判されても弁解できないのでは……?

2005(平成17)年1月31日記